

作物名：トマト

病害虫名：灰色かび病（病原：*Botrytis cinerea*）



果実の病斑



葉の病斑



茎の病斑

### 1 被害の特徴と診断のポイント

- ・果実、花卉、葉などに多く発生するが、茎や葉柄にも発生する。
- ・果実では、咲き終わった花卉に灰色のかびが密生し、花落ち部分から果頂部に広がり、被害部は水浸状となって軟化腐敗する。ホルモン処理をした場合は、花殻ががく片部に留まるため、がく片周辺から果実に感染し水浸状となって軟化腐敗する。
- ・葉では、葉先枯れ部分から寄生して、淡褐色水浸状の病斑が葉身内部に広がり褐変枯死する。また、葉身に落下した花殻に寄生して、そこから葉身に病斑が広がり褐変枯死する場合もある。
- ・茎では、淡褐色～暗褐色で長楕円形の大型の病斑をつくり、病斑が茎の周囲を取り巻くと、そこから上部の茎葉は萎れ、やがて枯死する。
- ・病斑部はいずれも灰色のかびを生じるが、多発している施設内では緑色の果実にしばしば直径が1～2mmのゴーストスポットと呼ばれる白いリング状の病斑を生じる場合がある。

### 2 伝染源及び伝染方法

- ・本病菌は被害植物に形成された菌糸、分生子、または菌核で越冬して第一次伝染源となる。また、有機物などで腐生的に繁殖、生存が可能のため、有機物の腐敗残渣も第一伝染源となりうる。
- ・二次伝染は、被害植物の病斑上に形成された分生子の飛散により繰り返される。

### 3 発病・伝染好適条件

- ・本病菌は糸状菌の一種で、不完全菌類に属し、分生子と菌核を形成する。
- ・菌の発育適温は23℃前後であるが、発病適温は20℃前後のやや低温と多湿条件で多発しやすい。
- ・施設栽培では、外気温が低くハウスを閉め切る時間が長くなる11月～4月に発生しやすい。
- ・本病菌は多犯性で、なす、きゅうり、イチゴ、レタス等、多くの野菜、花き、果樹類を侵す。

### 4 防除対策

- ・ハウス内が多湿とならないよう、こまめに換気を行う。
- ・果実の花落ち部からの感染を防ぐため、花殻落としを行う。また、発病部位は二次伝染源となるので、ほ場外へ持ち出して処分する。
- ・薬剤耐性菌が発達しやすいため、薬剤防除は異なる系統の薬剤によりローテーション散布する。

※ 薬剤防除にあたっては耐性菌の発生を防止するため、同一系統薬剤の連用は避け、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。特にQoI剤及びSDHI剤は、耐性菌の発生リスクが高いため、それぞれ単剤または相互の混用、混合剤を使用する場合は1作1回まで、効果が期待できる他成分を含む薬剤との混用の場合は1作2回までとする（下記ガイドライン参照）。

### 5 出典

- (1) 参考文献：日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）、農業総覧原色病害虫診断防除編2-①（農文協）、農業総覧病害虫防除・資材編2（農文協）、野菜・果樹・茶におけるQoI剤及びSDHI剤使用ガイドライン（日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会 <http://www.taiseikin.jp/guidelines/>）
- (2) 写真：宮城県病害虫防除所、宮城県農業・園芸総合研究所撮影